

専攻指導における実務・研究・地域社会貢献還元の取り組み

Efforts to return practical work, research, and community contributions to the education of each major

梶谷 崇* 秋野 禎見* 小笠原 聡* 佐々木 智之*
高村 茂* 濱谷 雅弘* 坂井 俊文* 谷川 寿郎*
塚崎 今日子* 牧野 高壮* 檜山 純*

Takashi Kajiya, Yoshimi Akino, Satoshi Ogasawara, Tomoyuki Sasaki,
Shigeru Takamura, Masahiro Hamaya, Toshifumi Sakai, Toshiro Tanikawa,
Kyoko Tsukazaki, Takamasa Makino, Jun Hiyama

概要

本稿は、人間社会学科の2022年度の課題研究および卒業研究の活動を報告するものである。2022年度の人間社会学科の課題研究と卒業研究は、経営学専攻、社会学専攻、心理学専攻、健康スポーツ専攻の4専攻で実施された。本学科のカリキュラムは、入学初年度に専攻を超えて広く学び、卒業に向けて専門の理解を深めていくものである。少人数教育の利点であるアクティブラーニングの充実、積み重ねによる専門の理解に加え、3年生課題研究や4年生卒業研究において、各自の関心に基づき、専門にとどまらない関連領域も同時に学べる点で大きな特色がある。高校教諭などの社会実務経験、教員自身の研究、さらには地域貢献活動などを学生に還元してきた取り組みや、フィールド実践の例を報告する。

1. はじめに

2022年度の人間社会学科の課題研究と卒業研究は、経営学専攻、社会学専攻、心理学専攻、健康スポーツ専攻の4専攻で実施された。本学科のカリキュラムでは、入学初年度は、専攻を超えて広く学べるようになっている。進級するにつれ、卒業に向けて専門の理解を深めていくものである。本学少人数教育の利点であるアクティブラーニングの充実、積み重ねによる専門の理解に加え、各自の関心に基づき、専門にとどまらない関連領域も同時に学べる点で大きな特色がある。

本稿は、2022年度のこのような教育実践の中から、3年生課題研究と4年生卒業研究での教育実践例を報告するものである。本学科のディプロマポリシーは、「科学的市民」の育成という教育理念のもとに、6つの資質や能力を身につけることを求めている。具体的には「コミュニケーション力」、「課題を発見し、問題を解決する力」、「自らを律し、学び続ける力」、「他者と協力して目的

を達成する力」、「専門的知識・技能を習得し、実践する力」、「総合力」である。これらを達成するために、具体的にいかなる取り組みが行われたか、以下、専攻別に報告する。

2. 経営学専攻

経営学専攻は、課題研究では18名が、卒業研究では23名が、3つのゼミ（坂井、谷川、檜山）に所属して活動を行った。経営学専攻では、1年生から卒業研究までの積み重ねによるカリキュラムに大きな特徴がある。

具体的には、1・2年生の基礎科目および基礎研究からの学びを、2年生後期科目と応用研究で一通りの基礎とし、それを3年生専門科目と課題研究でさらに応用しながら、最後にこれらの集大成として卒業研究を行う位置づけである。

卒業研究へつなげていく点で、専攻独自の特色がある。応用研究では、まずSTPを考え、SWOT分析を行い、価格戦略までひとつおりのビジネスプ

ランをグループで策定している。自分たちで課題を設定し、それを解決するために、グループでコミュニケーションをとりながら発表し、かつ他のグループにもコメントを行い、相互に研鑽を積む。3年生課題研究は、これらの成果を、3年生配当の専門科目の学びとともにさらに発展させるものである。3年生までのこれらの学びを発展させたものを卒業研究と位置づけており、一連の流れで取り組んでいる。

ゼミの所属は、3年生の6月に決定する。卒業研究まで原則として同一の所属となる。分属にあたり、個人の関心とともに、教員の研究の専門も考慮されている。

教員の研究専門分野は経営学や会計学であるが、ゼミでの課題研究や卒業研究には、各教員の実務経験や地域社会貢献が随所に還元されている。

特に、卒業研究には、教員の専門の研究として、組織とモチベーション、経営戦略、経営・財務分析などが反映されている。

2022年度は、道内でフィールド活動も実施された。以下、具体的な2022年度の活動を紹介する。

谷川ゼミでは、日高の浦河町にて、谷川牧場の視察とインタビューを行った。4年生の卒業研究と谷川先生のケーススタディを兼ね、3名で参加し、人材不足への対応や第一次産業としてのサラブレッドの生産可能性などを学んでいる。坂井ゼミでは、札幌市中央区内に店舗を構えるカフェを併設するドライフラワー専門店において、事前の店長へ聞き取りをした市場調査も踏まえ、男性の購入を意識した新たな女性向け商品の開発とその開発した商品に関するSNSを活用した広告戦略のビジネスプランの策定をしたうえで、アクションリサーチを実施した。檜山ゼミでは、「地域関係人口の活用」をテーマに、北広島市にて、北広島市企画財政課・ボールパーク推進期成会の産官Fビレッジ企画に13名で参加した。3・4年生合同での企画参加経験は、プレ卒論を通じて、2023年2月より、「きたひろしま新しい食のグルメ」企画委員への学生参加としてつながっている。

2022年度の卒業研究では、グループの研究も発表されるなど、学生の関心に応じた活動が報告されている。

3. 社会学専攻

3年生は、在籍者16名が3ゼミに所属しながら調査活動や実践活動を展開した。各自テーマの検討および基礎的なリサーチ活動を行い、最終的に卒論のフォーマットに則り卒研序章部分を完成させた。次年度はこの成果をもとに卒業研究に取り組む。社会学専攻では実践的な活動にも取り組んでいる。以下、具体的な2022年度の活動を紹介する。

ていね夏あかりは、1992年に本学学生の発案により誕生した区民イベントである。当日は区民と学生が協働して制作したちょうちん数千個を一斉に灯し夏の一夜を彩る。2022年度で31回目を迎え、夏の風物詩として区民に定着している。濱谷雅弘教授が実行委員長を務め、7月17日の開催を目指して学生とともに準備を進めた。当日は雨天により残念ながら中止となったが、準備段階において、小学生への制作指導やイベント企画に学生が主体的に関与した。また他のイベントにおいても学生が夏あかりの展示、ワークショップ等を担当するなど、年間を通じた活動を展開した。

また、2022年度は7名が余市フットパス準備会の活動に参加した。同団体は、余市町にフットパスコースを設定し、町内外の人々との活動、交流を通じた地域活性化を目指している。学生は準備会の調査活動、検討会議に参加した。3回の余市町調査・会議参加のほか、事例研究として恵庭市、黒松内町を視察した。2023年2月27日には報告会が開催され1年間の調査結果とコースの提言を余市町民向けに行った。2023年度はコースの広報、イベント活動を展開する計画であり、本専攻も継続して協力する。同様の取り組みをしている北九州市立大学廣川裕司ゼミとの交流もあった。9月12日には廣川教授と学生2名が来学して手稲エリアコースの試歩、情報・意見交換を行い、大学間交流を行った。

地域社会や他の組織と関わりを通して学ぶことも重要であり、2022年度は上記事例をはじめとしてその経験の機会を設けることができた。

4. 心理学専攻

心理学専攻では、対人コミュニケーションおよび臨床心理学を軸としたカリキュラム構成となっている。心理学における基礎科目にて自然科学近接領域をある程度履修した後、実践および臨床

領域として課題研究と卒業研究へ取り組むことになる。

対人コミュニケーション領域および臨床心理学領域双方の共通基盤として、日常性に近い事態を扱うため、学生たちはそれらを抽出するための方法論や表現方法を課題研究で取り組む。その内容はおもに、課題発表に向けたグループディスカッションによる発表形式や態度の創意工夫、質的なデータの収集であった。これらは3年生の課題研究において取り込まれ、卒業論文へ取り組む基盤を作るものである。

以下、具体的な2022年度の内容を紹介する。対人コミュニケーション領域においては、1年前期にコミュニケーションの基礎的な理解を図るための科目としてコミュニケーション心理学がある。コミュニケーションの構造、バーバル・ノンバーバルの比較、日常生活に存在する現象に着目する。ここで学んだ理論を、コミュニケーション心理演習Ⅰ・Ⅱではロールプレイングを手立てとして実践を通して深化させる。

臨床心理学領域においては質的なデータ収集をするための、参与観察の態度を養う取り組みを行った。対象とする事象を客観的に把握しようとすることに慣れてしまっている学生たちへ、自身の主観を用いて現象把握する態度を、繰り返し会得してもらい。それは日常性の高い出来事や日々の自身を取り巻く場における対人関係性をとらえ、それらを言語化する作業を繰り返すものである。主観的な影響に巻き込まれてしまい、データが大きくゆがむなどの偏りが生じないよう、ゼミ形式でメンバー間の相互関係を頼りに、妥当性ある主観を自らに形成する学びである。

上記の実践活動をもとに研究へ取り組むための素地を作り、4年生からは各々の卒業研究作成に取り組む。テーマ選定については教員から提示したものへ取り組ませるうながしは一切せず、学生が自らの疑問や課題抽出にむけた取り組みを重視している。これまでの自身の体験を振り返るなかで、自らに影響を与えている体験は何なのか、さらにその体験の意味を問うことをうながすものである。

卒業研究に向けた彼らの取り組みとその結果は、自身の生活世界へ向き合う姿勢を養うものであり、その理解は卒業後の人間関係や社会事象を把握するための素地を作るものとなっている。

2022年度は合計13名が上記の学びに取り組んだ。主なものは、ファミリーバイオレンスの現状について把握するための調査研究や、離婚経験をした子どもが青年期へとどのようにして心理的プロセスを経たかを調査したものなどであった。

5. 健康スポーツ専攻

健康スポーツ専攻では、2022年度で卒業生数80名となるが、大学の幾多の変遷を受け次年度卒業生をもって終了となる。2022年度は、3年生10名、4年生10名が在籍しており、13科目の専門科目が開講された。

3年生では、特に、「日本語表現法Ⅲ・Ⅳや人間社会課題研究Ⅰ・Ⅱ」において「健康・スポーツ」に特化した専門科目として、アンケート調査の集計・解析手法を学び、さらには、個々の学生がアンケート調査用紙の作成、アンケート調査の実施、そして集計・解析し、レポートとしてまとめるという授業を実施した。これらの科目を履修修得しながらコミュニケーション能力を養い、自らの課題を見つけ、その解決方法を見出し、卒業研究へと結び付けている。

4年生の卒業研究では、2022年度は10名の学生が無事修了し、社会人としての第一歩を踏み出している。特に関心が高いものとして、大学生における生活改善対策を考える卒業論文が数多く発表された。長寿国日本で生活していくうえで青年期における生活習慣を大切にすることが示唆されている。今後一社会人として自らの健康により関心を持つとともに身近の人により関心を持ってもらい、現代社会の抱えている病「生活習慣病」の予防についての知識を広めていけるよう、英知を現代社会に活かしていくものである。

以下、具体的な2022年度の卒業研究を紹介する。卒業研究のテーマでは、生活習慣と健康に関するものが6編、ダイエットに関するものが2編、健康運動が身体に及ぼす生理的反応に関するものが1編、競技種目のトレーニングに関するものが1編であった。

本専攻では、専攻独自の特色あるカリキュラムで資格取得につながる体制をとっており、専門性を活かした職種へと導いている点で大きな特色がふたつある。ひとつは、積極的な健康づくりを目的とした運動を安全かつ効果的に実践指導できる能力を有すると認められ、健康づく

りを目的として作成された運動プログラムに基づいて実践指導を行うことができる者に与えられる「健康運動実践指導者」である。もうひとつは、様々な体育・スポーツ施設全般の維持管理に関する総合的な知識を有し、スポーツ施設の管理者としてわが国の体育・スポーツの振興に寄与すると認められる者に与えられる「スポーツ施設管理士」である。2022年は、健康運動実践指導者3名、スポーツ施設管理士8名の合格者を輩出し、2名の卒業生がフィットネスクラブのインストラクターとなった。

さらに、本専攻の特徴として、公務員として活躍する卒業生も多いことが挙げられる。2022年度は、警察官2名、消防士1名が公務員として巣立っている。

6. おわりに

以上、本稿では、人間社会学科の各専攻における教育実践について、具体的な報告を行った。

これらからうかがえるように、それぞれの専攻において、1年生から2年生にかけての基本的知識の習得とともに、アクティブラーニングのなかでコミュニケーション力、課題発見・解決力、自主的かつ継続的な学びの姿勢、他者と協働する力、といった卒業研究の基盤となる実践的能力の段階的な習得・向上が図られている。3年生以降はゼミ活動において、卒業研究に向け、より専門的・実践的な調査活動、フィールドワーク、データ収集・分析作業が展開されており、4年生には、学生自らが抽出したテーマについて、それまでに身につけてきた基盤能力および専門的知識・技能を駆使して卒業研究に取り組んでいる。

卒業研究においては、専攻ごとに高度に深い専門性が求められることはもちろんである。しかし、いずれの専攻の報告からもうかがえるように、得られた研究成果の多くは専門分野の狭い枠組みのなかに留まるものではなく、広範かつ多様な実践的意義（たとえば、地域や社会への貢献、生活世界へ向き合う自身の姿勢の構築、卒業後の人間関係や社会事象を把握するための素地の育成、現代の社会問題ともいえる生活習慣病の予防に向けての取り組み等）と堅固に結びついている。このような傾向、また、健康スポーツ専攻における健康運動実践指導者、スポーツ施設管理士といった有資格者の多数の排出、およびフィット

ネスインストラクターや警察官、消防士など多様な分野で活躍し、社会に貢献する卒業生の姿には、専門性と実践性、そして優れた人間性をバランスよく兼ね備えた人材の育成を目指す本学科の本懐を垣間見ることができよう。

これらの学科における基盤的学び、専門的知識とスキル、および卒業研究にいたる一連の活動と成果は、学生たちが今後社会で生きていく上での一助となり、また何らかの形で地域や社会に還元されることになる。今後も、より効果的な教育実践のあり方を模索しながら、学科教員一同教育活動に真摯に携わっていきたいと考えている。